

(様式4)

学位論文の内容の要旨

天野 弘美 印

(学位論文のタイトル)

Application of 18-item DEOS for dementia elderly people living at home and its reliability and validity

(在宅で暮らす認知症高齢者への18項目版DEOSの適用とその信頼性・妥当性)

(学位論文の要旨) 2,000字程度、A4判

目的:在宅で暮らす認知症高齢者に対して18項目版DEOS(Dementia Elderly Odayaka Scale)を適用し、その信頼性と妥当性を検証することである。

方法:A県にある15施設の訪問看護ステーションを利用している在宅で暮らす認知症高齢者93名を対象とした。3名の評価者(看護師2名と対象者の家族1名)が1名の対象者に対して、2週間程度のインターバルをおいて、18項目版DEOSの調査項目を2回評価した。18項目版DEOSは、対象者の日常生活の状況を他者が観察して評価するスケールである。これは、先行研究(辻村・小泉、2010)の25項目から18項目に改訂されたものである。分析手順は、因子分析において各項目の内容と因子負荷量の考察から、18個の項目が3領域に分けられることを把握した後、信頼性の分析では、全体と各領域間のItem-Total相関やCronbach α 係数から内的整合性を検討した。Test-retestでは、1回目と2回目の合計点数の級内相関係数(ICC)を算出した。評価者間一致率については、評価者間の総得点のICCと各質問項目における得点差について検討した。さらに、対象者の属性(CDR、要介護度、診断名)による得点分布について分析した。統計は、IBM社の統計パッケージSPSS 22.0J Statisticsを使用した。

結果:対象者は、男性が30%、女性が70%を占め、平均年齢は85.1 \pm 7.0であった。診断名は、アルツハイマー型認知症(AD)が35%、脳血管型認知症(VaD)が20%、要介護1と要介護5が最も多く、それぞれ25%であった。CDR2とCDR3が最も多く30%であった。評価者である家族の対象者との関係は、子供が最も多く、次いで配偶者であった。因子分析では、第I因子は、「自分の意思や願いを主張できる」「好きなことに打ち込める」「好きなおしゃれ(化粧、髪型、服装、持ち物)ができる」「自分のペースで日課を過ごせる」の項目の因子負荷量が高く、【自分らしさの発揮】と命名した。第II因子は、「人のことを気遣える」「他者にやさしくできる」「気のあう人と一緒に過ごせる」の項目の因子負荷量が高く、【周囲との交流】と命名した。第III因子は、「笑顔で喜びを示す」「感情(喜びや苦しみなど)を表現できる」の項目の因子負荷量が高く、【感情の豊かさ】と命名した。因子間の相関係数については、第I因子と第II因子が0.75、第I因子と第III因子が0.75、第II因子と第III因子が0.74であった。2評価者間一致率においては、各項目の平均得点差は0.5~0.8、看護師と家族における2評価者間の総得点のICC(1回目)は、0.75($p<0.01$)、2回目は0.73($p<0.01$)であった。また、看護師と家族における2評価者間の各質

問項目別の ICC は、0.47～0.67 ($p < 0.01$) であった。評価者内一致率では、Test-retest による ICC は、看護師においては 0.93 ($p < 0.01$)、家族においては 0.97 ($p < 0.01$) であった。尺度全体の Cronbach の α 係数は 0.95、各領域の α 係数は、【自分らしさの発揮】が 0.90、【周囲との交流】が 0.91、【感情の豊かさ】が 0.86 であった。各領域の Item-Total 相関は、【自分らしさの発揮】は 0.64～0.77、【周囲との交流】は 0.73～0.80、【感情の豊かさ】は 0.57～0.76 であった。対象者の基本属性による得点分布について、CDR においては、認知症のレベルが軽度から中等度レベルにおいては、約 3 点であるが、CDR 3 と重度になると約 2 点となり全体的な得点低下がみられた。AD と VaD を比較すると、VaD の方が「自分の意思や願いを主張できる」「ゆっくりくつろげる」、AD では、「他人のために何かができる」の平均得点が高かった。また、「笑顔で喜びを示す」のような表情や感情を評価する質問項目では、CDR や要介護に関係なく得点は高値であった。

考察：18 項目版 DEOS の Cronbach α 係数では高い信頼性が得られた。また、Test-retest では、看護師と家族ともに有意な高い相関関係で、再現性の高さを確認した。2 評価者の相関では、看護師と家族における ICC は中程度から高度であった。さらに、2 評価者の得点差の平均は 1 以下であり、その差は極めて小さいことを確認した。以上を踏まえて、18 項目版 DEOS は、尺度としての信頼性を確認した。妥当性については、今回の調査では基準連関妥当性の検証はできなかったが、先行研究 (辻村・小泉、2010) では、25 項目版 DEOS と QOL 尺度、BMD (Behavior and Mood Disturbance scale) 尺度の両者に有意な相関を確認した。よって、25 項目版の尺度としての基準連関妥当性は確認されている。18 項目版は、25 項目版から 18 項目を選択しており、25 項目版で確認された基準連関妥当性は継承されていると考えられる。

結論：在宅で暮らす認知症高齢者に対する 18 項目版 DEOS の信頼性と妥当性を確認した。DEOS は、臨床において対象者がもつ良さや強みを活かしたケアプランの立案などへの活用が考えられ、また、看護介入の効果を評価するスケールとしても期待できる。